

高齢社会と向き合う

市来農業高校三年 福田 幸雅

「トロトロしてんじゃねえよ、ばあさん。」

これは、先月私が目の当たりにした光景だ。私は母と買い物に来ていた。その日はちようどお盆の前日ということもあり、レジは非常に混雑していた。私たちの並んだレジも例外ではなく、たくさんのお客さんが長い列を作っていた。私たちの前には、青年二人が並び、その前には、おばあさんが会計をしていた。おばあさんの会計はたくさんの買い物で長引いていた。そのとき、青年の一人が怒鳴り声を上げたのだ。

「おい！ トロトロしてんじゃねえよ、ばあさん。後ろが詰まってんだよ、早くしろよ！」

そのおばあさんは、申し訳なさそうに何度も頭を下げていた。私はその様子を見ながら、「いい大人が年寄りに向かって何言っただ。あの大荷物なんだから、少しくらい時間がかかっても仕方ないだろ。」と、腸が煮えくり返っていた。

平成二十九年版高齢社会白書によると、日本の高齢化率は二十七・三%、世界一高齢化が進んだ国である。地方ほどその比率は高く、少子高齢化と過疎化が同時に進んでいる。「限界集落」と呼ばれる集落も、地方ほど多い。限界集落の道路状況は悪く、交通の便も悪いため、若い人が集落を出ていき、それに伴って商店が消え、生活の利便性が悪くなり、さらに人口が減っていくという悪循環に陥っているのが現状だ。私が現在住んでいる集落もそんな限界集落の一つである。私の住む集落にも、大きなスーパーがあるわけではない。しかし、自分たちで食べるものについては何とか自給自足でまかなえており、集落のお年寄りの方々もそこまで苦勞はしていない。近所に住む私の祖父母もたいはいの食料は自給自足でまかなっている。困るのは日用品の調達だ。幸い、祖父はまだ元気で、自分で車を運転できるので、祖母と一緒に大型スーパーへ買い物に出かけている。しかし、車の運転ができないお年寄りは、バスの便も少なく、たとえバスで出かけられたとしても、一度にたくさんの買い物は難しいため、御近所さんに頼んでいる状況だ。まさに、「買い物難民」である。それでも、集落に住む人たちはみな顔見知りで、家族同然のような付き合いだから「困ったときはお互いさま」というのが当然の環境にあり、快く買い物を引き受けている。このように地域で支え合う環境に生活しているからこそ、私は、困っているお年寄りを頭ごなしに怒鳴るような青年が許せなかったのだと思う。

だが、私の集落も、年々目に見えて少子高齢化が進んでいる。いつまで集落に住む人ただけで支え合うコミュニティーが維持できるかわからない。「高齢者に優しくしよう」、「それができていることをして支え合おう」というスローガンだけで

は、お年寄りが満足に生活できない日が来るかもしれないのだ。だからこそ、高齢化が進んだ日本のモデルケースとして、このような限界集落を社会全体で支えていく仕組みを作っていくことが必要なのではないだろうか。

すでに、日本各地で限界集落を社会全体で支える仕組みを実践している地域もある。例えば、ネットスーパーなどもその一つだ。必要な食料品や日用品をパソコンやスマホから注文すれば、自宅まで届けてくれる。車を運転できなくても、交通の便が不便でも、自宅まで届けてくれるから不自由しない。しかし、パソコンやスマホが当たり前の時代になったとは言え、パソコンやスマホを自在に操作できるお年寄りは少ない。そこで、移動販売車を定期的に巡回させているところもある。最近、スーパーだけではなく、銀行や郵便局が車で移動して業務を行っているというニュースも見かけた。週に数回の巡回日には、時間前からお年寄りが集まり、大切なコミュニケーションの場所にもなっているようだ。このような取り組みが、もともとと全国各地に広まっていけばいいのと思う。

私は将来、介護福祉士になりたいと考えている。そのために、高校卒業後は、大学に進学するつもりだ。介護福祉士の資格を取得するには専門学校への進学で十分だが、介護福祉士の資格を持つているだけでは、介護施設に入所しているお年寄りにしかサービスを提供できず、社会全体で支え合わなければ不自由な生活を余儀なくされる多くのお年寄りを助けることはできない。そこで、介護福祉士の資格を取得するだけではなく、大学で社会福祉のあり方を専門的に学び、介護施設を、お年寄りが安心して暮らせるまちづくりやネットワークづくりをするような、地域の中核センターにしていければと考えている。そして、自分が勤める介護施設で、お年寄りやその家族の方々の声を直接聞きながら、ぜひ、その夢を実現したい。今、私はその夢に向かって、少しずつ歩み始めている。

(審査員評) 少子高齢化や限界集落の問題は、現代の日本が抱える大きな課題である。その課題と向き合っていくか。身近な問題としてこの課題と向き合う筆者の姿勢は、実に頼もしい。生活文ではあるが、具体的な数値を示したり、自らの体験を通して自分の考えや夢を語りたりする構成は、小論文にも生かすことのできるものである。書き出しにセリフを持つてくる工夫も、読み手を引きつける工夫として、とても有効である。

生かされて生きる

市来農芸高校二年 中野 莉穂

私は、市来農芸高校に入学する前、それほど農業について関心があったわけでも、関わりがあったわけでもありませんでした。せいぜい、地域の子ども会活動で米作りやサツマイモの栽培をした程度で、農業についての知識や苦労も知らなければ、動物の「命」について考えたこともありませんでした。また、食べ物の好き嫌いも多く、当然のように食べ残しをしていました。特に鶏肉は苦手で、鶏肉を使った料理はほとんど食べられませんでした。

それには、こんな理由があります。

私の家では、幼いころから鶏を飼っており、中にはひよこから育てた鶏もいました。ひよこのころから育てていた鶏は、私によく馴染んでいて、よく私の後ろをついて歩いていました。その鶏が、ある日、私の知らないうちにいなくなっていました。父に鶏の行方を尋ねると、「歳が歳だから、そろそろ食べようかと思って捌いたよ。」と言われ、とてもショックを受けました。このときから、私は鶏肉が食べられなくなってしまうのです。

しかし、一年生のときの鶏の解体実習で、さっきまで生きていた鶏が解体されていく一部始終を目の当たりにし、私になついていたあの鶏が殺されたこと知ったときのショックとは違うショックに襲われました。私たち人間は、動物の「命」をいただいている、「生きていく」のではなく「生かされている」のだということに気づかされたのです。それ以来、私は殺された鶏のことを本当に思うのなら、鶏肉を食べないのではなく、美味しく食べることが鶏のためになるのだと思うようになり、少しずつ苦手を克服していききました。また鶏の生肉は食べられないので、完全に克服できたわけではありませんが、どんな鶏肉料理も美味しく食べられるようになりたいと思っています。

また、肉用牛の実習では、牛の出荷に立ち会う経験もできました。その日は、三頭の牛の出荷をする事になっていて、出荷前にその三頭の牛を念入りにブラッシングしました。そのとき、父から聞いたある話を思い出しました。牛は、出荷されたら自分が殺されてしまうことを知っていて、出荷される前は涙を流すのだそうです。この話を思い出した私は、ブラッシングをしている牛たちの潤んだ瞳を眺めながら、「この牛たちも、出荷されることが分かっているのだろうか。」と思いました。いよいよ牛を運ぶトラックが到着し、いざ牛を乗せようとする時、今まで素直に言うことを聞いていた牛が、トラックに乗ることを嫌がり、なかなかトラックに乗ってくれません。すでにトラックに乗っていた牛たちも、私にはどこことなく悲しげな表情に見えました。私はその姿を見ながら、牛も私たち人間と同じ「感情」を持っているのだということを実感しました。ようやく乗ってくれたトラックを見送りながら、私はどこか悲しい気持ちになっていました。

ほかに、牛の出産に立ち会ったり、豚の去勢を見学したりという実習も経験しました。そのたびに喜んだり、感動したり、つらかったり、かわいそうに思ったりします。しかし、私たちが実習で育てているのは、あくまでも経済動物です。その

生死にいちいち感傷的な気持ちになってはいけないうちの命が生まれません。ですが、苦労して大事に育ててきたからこそ、愛情が生まれます。これは、農業に携わる人なら誰でも同じだと思います。家畜だけではありません。作物であっても同じです。安心・安全で、美味しい食べ物が私たちの元に届くまでには、農家の方々の苦労や愛情があり、たくさん動物の命が犠牲になっているのです。今、私たちが元気に生活できているのは、農家の方々はもちろん、私たちのために自らの命を提供してくれた生き物のおかげ——そう、私たちは、「生かされている」のです。私は、農業高校に入学して、初めてこのことに気づくことができました。このことに気づいてからは、毎日毎食、「ありがとう」の気持ちを込めて、「いただきます」や「ごちそうさま」を言い、食べ残しをしないように心がけるようになりました。

私は、将来、動物の飼育員になりたいという夢があります。幼いころに、ペンギンを散歩させている飼育員さんを見たことがきっかけです。高校卒業後は、飼育員に必要な専門的な知識や技術を習得するため、専門学校に進学するつもりです。農業高校で命の大切さを学んだ今、単に専門的な知識や技術を習得して動物の世話をするだけでなく、動物園や水族館に来てくれる子どもたちに、命の大切さを伝えられる飼育員になりたいと思っています。そして、これからも、「生かされている」自分の命を大切にしながら、農家の方々、家畜や作物への感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと思っています。

(審査員評) 純朴で素直な生徒が、何も飾らずに思いのままを書き綴った作品。読む側にまでその純朴さが伝わってくる。農業高校に通って一年半、農業に興味があったわけでもない筆者の姿容、それは、「命」の重みや、自らの命が他の命の犠牲の上に立っていることに気づいたことであった。「生かされている」ことに気づいた筆者は、きつと自分の命を大切に生きていくことができるだろう。この作文には読み手をぐっと引き込む魅力がある。それは、文章の技巧ではなく、体験の充実のためであろう。豊かな体験が感性を豊かにし、人に伝える意欲を豊かにする。観念的ではなく、体験的・感覚的な純朴さに心を打たれる作品である。

私の初給料

市来農芸高校一年 鉾 谷 梨 那

私は高校一年生。四月に農業高校に入学し、すぐに義務入寮生活が始まった。規則正しく厳しい毎日をなんとか乗り越え、待ちに待った夏休みを迎えた。この夏休みは人生で初めてのアルバイトをする、そう決めていた。自分の小遣いは自分で稼ぎたい。母の負担を少しでも軽くしたい。それが理由だった。

私のアルバイトはファミリーレストランの裏方の仕事だ。皿を洗ったり料理の仕込みをしたり、大きな機械で米を炊いたりという、お客様からは見えない仕事だった。毎日が忙しく大変だった。特に、お盆の期間は目の回りそうな忙しさだった。仕事に慣れてきたとは言えず、一つ一つの作業には注意する点がかなり多く、覚えることがありすぎた。頭がどうにかなるのではないかというくらい大変だった。一緒に仕事をしている方々は、優しく教えてくださる方もいれば、厳しく指導してくださる方もいた。慣れない仕事を私なりに一生懸命やっているつもりだったが、厳しい指導が嫌になることもあった。

仕事のなかに、お客様の食べ残しを水で流し、その皿を軽く洗って機械にかけるという作業があった。これが強烈だった。お客様とはいえ、他人の食べ残したものを触って洗うということが、私にはきつかった。汚い。臭い。ただ臭いだけでなく、いろんな臭いがある。もう辞めたい。仕事内容を覚えることの大変さより、私の精神、心がもたないと思った。私は、初めてのアルバイトに音をあげそうになった。

私はアルバイトをしながらこんなことを思った。お金が簡単に入ってくる魔法のようなものがないかな。宝くじが当たったらしいのにな。苦勞せず、嫌な思いをすることなく、お金を得ることができれば最高の気分ではないだろうか。しかし、そんな妄想は、アルバイトに精を出し、自分の仕事と向き合う人たちを目の前にしているうちに薄らいでいった。やはり、自分が使うお金は自分で稼ぐしかないのだと思う。私は、母によく「友だちと遊ぶからお金ちょうだい。」とせがむ。母は、そのたびに私に小遣いを渡してくれるし、母だけではなく、祖父母からもよく小遣いをもらっている。私が何気なく「ちようだい。」と言って、何気なく使っているお金は、母が一生懸命に働いて得ることのできた努力の証なのだ。そう思うと、本当に価値のあるお金で、大切に使用しなければならぬものなのだ。アルバイトを経験して、働くことは難しく、お金は簡単に手に入るものではないということに気付かされた。

農業高校で勉強して約半年。私が今勉強している農業で生計を立てることも、大変なことだと実感している。土を耕し、種を蒔き、肥料を施し、除草を行い、収穫を待つ。ときには天候に左右され、生育や収穫を心配する。真夏の実習など、とんでもなかった。太陽がぎらぎらと照りつけるなか、ビニールハウス一棟のすべてを張り替えたり、水田に肥料を撒いたり、汗をぐっしょりかいて外で数時間の作業をした。台風の襲来が予想されれば、対策が欠かせない。私たちは大勢でそれができるけれども、農家の方たちはどうだろう。もっと少ない人数で、もっと広い畑や田を守らなければならないのではないか。農業で収入を得ている人、農業で生きている人たちはすごい。そん

なことを考えた。

私たちは、実習で収穫したものをお客様に販売することもある。買ってくたさるお客様が支払う代金も、その方たちが働いた証。そんな大事なお金を支払ってくたさることを思えば、もっとおいしい新鮮な野菜を育てて喜んでいただきたい。もっともっと私たちは実習を頑張りたいものを作りたいたいという気持ちになる。私は一年生なので、農業実習の経験はまだ足りない。収穫の秋が過ぎると、農業にとっては厳しい季節となりそうな冬がやって来る。どんな実習が待っているのか。先輩からは、家畜の糞を混ぜて堆肥を作ったり、鶏の解体実習をしたりすると聞いている。たぶん、とても臭いだろう。目を背けたくなるだろう。手も汚れるだろう。それでも、農業の大変さを少しずつ経験し、農業の苦勞もすっかりと学んでいかなければと思っている。

私たちが生きていくためには、食べ物や水が必要で、大切なものだ。一方、お金も大切なのだと思う。生きていくということとは大変なことなのだ。お金を稼いだということは、その人なりに努力し続けた結果であり、高校生の私はその頑張りのおかげで今があるのだと思う。どんな仕事でもお金を稼ぐということとは大変なことなのだろう。

八月の私の給料の半分は母へ渡した。残りの半分から祖父母へのプレゼントを買った。おそろいの湯飲みと箸。祖父母はそれをうれしそうに使ってくれている。

(審査員評) 初めてのアルバイトを通じて働くことの難しさとお金の大切さを学んだ筆者。高校一年生らしい素直な書きぶりで、筆者の感じたこと、考えたことがストレートに伝わってきた。樂をしてお金は稼げないということから自らの生活を反省するだけでなく、農家の苦勞にまで考えを膨らませることができているのは、農業高校生ならではの光輝である。タイトルにもなっている、苦勞して手にした初給料の使い途は最終段落で描かれ、読み手に爽やかな読後感を与えている。